

「帰郷祈念碑」除幕式中止の経過報告

2008年5月16日

黒田 福美

今回の「帰郷祈念碑」除幕式に際して、皆様には「日韓新時代を築く第一歩」としての期待を寄せていただきましたが、大変残念な結果になりました。私の力が及ばず皆様の期待を裏切るばかりか、多大なるご迷惑をおかけいたしました事を心からお詫び申し上げます。

「帰郷祈念碑」は5月13日午後4時、石碑の所有者である私になんのことわりもないまま市職員らによって撤去され、今はさるところに預けられているそうです。

また対外的には「黒田は了承済み」と公言しているようですが決してそうではありません。

所有者に無断で撤去したことは器物破損であり、それを反対派ではなく市当局が行ったことは明言しておきたいと思えます。

<前日に決まった行事中止>

泗川市が石碑建立の為の敷地を提供して下さることになった昨年9月から、まさに寝食も忘れて5月10日の除幕式の準備をしまいりました。

除幕式参加ツアーも組まれるに至り、これをバックアップしようと韓国観光公社主催の記者会見が3月24日、日比谷のプレスセンターにて行われました。その結果日本からは30名ほどのお客様がご参加くださり、5月9日には日本を発って泗川に入っていました。

私は8日夕刻に泗川に入りましたが、この日泗川市長は反対派議員らの抗議を受けて、市が協力してきたことに対する謝罪をし、除幕式中止させること、並びに石碑を撤去する方向で考えることを記者会見で発表していたようですが、私にはなんの連絡もありませんでした。

なにも知らない私は9日、除幕式当日10日の朝から行われるシンポジウムの会場や、除幕式場の設営状況をチェックするべくシンポジウム会場で観光課のみなさんとお会いしました。そこで初めて市からの協力が一切うち切られたことを告げられたのです。また当初市から提供される筈であった会場使用料の支払をその場で求められ、支払を致しました。

ですが、その時にはまだ希望を持っていました。

とにかくシンポジウムの会場は押さえたわけです。私達はすぐさま石碑建立の現場に行きました。マイクやテントなどなくても、私達だけでささやかに除幕をすればよいとその時は思っていました。

<反対派の方との会談>

私は反対派の方々に是非お目に掛かりたいと市側に要請しました。

これまでも、反対派議員がいるということを聞いて、是非お会いして私達の真意を説明したいとお願いしたことがありましたが、自分たちで解決できるということで、それは叶えられませんでした。

直前にはなりましたが、人間同士心から話をすれば和解の糸口が掴めるかも知れないと思っていたのです。



午後5時、歴史研究家の方と反対派市議員イ・ジョンヒ議員（進歩連帯）のお二人、30分ほど遅れて光復会（独立運動家とその子孫で作る団体）二人の方がお見えになりました。

議員からは主に、

- 1) 今回の事が市長の独断であり、市議会の承認を得ていない。
- 2) 日本からの正式な謝罪もないままこのような石碑が建つことは疑問。
- 3) 果たして卓庚鉉が石碑に刻まれる人物としてふさわしいかどうか吟味されていない。
などの意見がのべられ、光復会の方からは、「反日独立運動を戦った末裔としては靖国に祀られている人物の石碑など到底許すわけにはいかない」という主旨の意見が述べられました。

それに対して私はこう答えました。

- 1) 市議会内の事情は私達が知る術がなく、市長との約束を信じて今日まで来た。
- 2) 日韓の問題は国家レベルで解決する問題と、民間レベルで暖かい交流の雰囲気を作りたくてゆくことの両輪が必要だ。私は民間人として、これまで25年間その雰囲気作りに専心してきた。今回もまた民間レベルで交流をする意図であり、国家を代表して謝罪できる立場ではない。
- 3) この石碑は一人の兵士を祀るものではない。創氏改名によって日本人として亡くなった韓国人は世界中にひろがり、その魂は今もさまよっている。そういう方々の魂が故国に帰郷し安住を願う石碑である。
- 4) 独立運動に参加した方は国民の1%ほどだろう。当時は誰もが生活に追われて日本の名前をもって、直接間接に日本に貢献せざるを得なかった時代であった(これは議員の両親もそうだと思う)。そのように生きざるを得なかったのは個人の罪ではなく、その時代の悲劇だ。時代の犠牲になった人達を悼むことは、まさに独立運動に参加できず、やむなく日本人として過ごした時間を持つ人達の心も慰めることができる。
- 5) また、そういう時代を作ったのはまさに私達日本人であり、私達は当事者でもなければ国家を代表して謝罪する資格もないのだが、せめてそのことを隣人として痛みに思い、すまない気持ちを表そうとしているのが今回海を越えてやってくる人達なのだ。

除幕当日、日本からは10社あまりの報道陣が来ることになっています。またその場でもすでにテレビカメラが私達のやりとりを見守っていました。

私はなんとか妥協点を探そうとしました。

「争乱する場面を露出することで利益を得る者はない。私達も困るし、市の体面も傷つく。なにより、日韓友好を願い、かつて日本人として葬られた多くの韓国人の御霊に哀悼の意を表したいという何の罪もないお客様を追い返したとあっては韓国という国のイメージにも関わる。あなた方の気持ちも分かるので、にぎにぎしく行うことは避け、私達でひっそりと石碑を見て帰るので、一行が安全で静かに帰れるようお願いしたい」

そう申しましたが、反対派のみなさんの意志は固くとにかく全ての行事を中止せよの一点張りです。特に光復会の方はもしも強行するならば実力行使をすることでした。

その場に市の観光課長も同席していましたが、取りなすでもなくただ黙っているだけでした。

帰り際、歴史家の方が「市にも責任があるようだから、最小限の協力は求めてもいいのでは」と言い置いてお帰りになりました。

今回は公人である霜出勘平南九州市長がわざわざお見えくださいました。私どもの強い要請で金守英泗川市長はその夜、霜出市長を訪れて正式に謝罪なさいました。

<除幕式当日>

このままでは反対派の抗議行動にさらされるということで、急遽除幕式前に予定されていたシンポジウムは会場を某ホテルの宴会場へと場を移すこととなり、予定されていたシンポジウムを中止して「説明会」の名目で集会を開くことになりました。

冒頭、私が除幕式の中止をお詫びし、ここまでに至った経緯を皆様に説明しました。続いて観光課長が市を代表して皆様にこれまでの経緯説明とお詫びの文章を読み上げました。

それにて早々に退散しようとする課長に留まっていたいただき、みなさんに忌憚のないご質問やご意見を求めました。韓国のマスコミは「釜山国際新聞」をのぞいてほとんどお見受けしませんでした。日本からの報道陣は大勢詰めかけています。またこのことに関心を持ってお越し下さった韓国人のお客様も多数おいででしたので、ここでの発言はいつか韓国社会にも漏れ伝わってゆくと思ったのです。

日本からのみなさんは実に冷静に整然と質問なさいました。

「市としての対応に問題がなかったか」「約束を守り信頼しあうことが日韓の良好な関係を築くのではないか」「我々は民間人として哀悼



の意を表しにきた。理解してほしい」「石碑を撤去するというがその後どうなるのか」、また何かでこの催しを知ってわざわざ訪ねてくださった日本人のお客様からは「さっき会場に行ったら反対派がシュプレヒコールをしていた。正式な謝罪というが謝罪をすれば友好的な関係になりうるのか」等々のご意見があり、課長からは当たり障りのない答弁がなされました。

ですが、この「説明会」は意外にも当初私達が予定していたシンポジウムよりもはるかに内容が深く、日韓相互理解に向けて確かに一歩を進めたと実感できる集会になりました。

お出でになった記者さんたちからも「凄いレベルの方たちが集まったようだ」「胸が熱くなった」「みなさんの抑制的な態度に感心した」との声があがるほどで、居合わせたみんなが共に茨の道に鍬を打ち込んで開墾してゆく感動を分かち合ったような瞬間でした。

今回ボランティアで参加してくれたベテランの国際通訳であり、私の友人である女性が速やかな通訳をしてくれたことで、このような充実した時間を持つことが出来たと深く感謝しています。

一連の質疑応答を終え、三進トラベルサービスの立木社長、韓国側で私を助けてくれた洪教授からも挨拶をして終了となりましたが、そこで観光課長から「現在石碑建立場所には反対派も来ているが警察の機動隊も駆けつけて、私達のために道を開けてくれることになった。除幕式も予定どおり消化することができる」と伝えてきました。

それでも万一反対派と小競り合いなどになれば危険です。「遺族のみなさんも現場にお見えの筈です。私は主催者としての責任もありますのでこれから現場に向かいますが、皆様は安全を考えて行動してください」と申し上げ現場に向かいました。

ですが、結局ツアーの皆様全員が現場おいでになりました。

バスを降り、現場へ続く道にはいろいろな人がそぞろ歩いていて反対派なのか除幕式に参加のお客様なのか区別がつかず戸惑います。シュプレヒコールの声が聞こえるとともに、目の前の機動隊が私達のために道を開けるどころか私達をおしとどめるように盾を翳しているのを見て途方に暮れました。するとあっと言う間に目の前にカメラの砲列ができ、何も見えなくなりました。私が呆然としていると、霜出南九州市長が「私達が行ける最前線まで行きましょう。そしてそこで静かに参拝して戻りましょう」とおっしゃいました。

その一言でやっと私は我に返り、ちりぢりになったみなさんに呼びかけて最前線まで進むとみなさんと共に静かに祈りを捧げその場を辞しました。

その後、ツアーでお見えになった方々は旅行社の用意した食堂で昼を済ませて慰霊登山へと向かったのです。



韓国ではこのような催しがあると主催者は招待客に食事を振る舞うという習慣があります。

私達が予め準備してあった食堂へ向かいますと、すでに50名ほどの方々がお集まりでした。洪先生の呼びかけで沖縄遺族会（沖縄戦で亡くなった韓国人遺族の会）の方々もお見えます。ソウルを出発する際、洪先生に連絡があり、状況が悪化しているのでお出でにならないよう要請したそうですが、35名のうち15名は「それでも激励の為に駆けつける」と言っておいで下さいました。

そうこうするうちに現場からデモ隊も機動隊も撤収したとの連絡が入り、遺族らと共に現場に駆けつけると、さっきの騒ぎが嘘のように広々とした公園は静まりかえていました。

私たちが力を合わせて石碑から青いシートを引き剥がすと、重厚な塔が現れました。卓庚鉉さんの従姉妹にあたる卓貞愛さんは「今朝の雨は兄さんの涙雨だったのね。ここまで来るのはどんなに苦労だったか、私達はなにもできなくて申し訳ない」と涙をぬぐいました。またいつも控えめな李順男さん（卓さんの従兄弟の嫁）は「誰もいなかったら、大声を挙げて泣きたい気持ちよ」とおっしゃいます。遺族の皆さんに初めてお会いしたのが2000年ですから、9年もかかってしまったのだと年月を振り返りました。従兄弟の南鉉さんや鳥浜トメさんの娘さん、赤羽礼子さんがその間に亡くなったことは本当に残念でした。

私達は元のようにシートを掛け、静かに解散しました。

その後に慰霊登山から戻ったツアーのみなさんと合流し、石碑までお連れしました。先ほど嚴重に包んだシートを再び外すのですが、シートを外しに掛かった男性陣は生き生きとして、「自らの手で碑の除幕をした」ことを喜んでいらっしゃいました。幕が外されると拍手が起きました。わがことのように喜んで、熱心に写真を撮ってくださるみなさんの姿は私の心に浸み入りました。



<突然の撤去>

12日夕刻に日本に帰国した私は、13日の朝から韓国大使館、日本大使館に石碑が撤去されないよう保護要請の電話をしました。

反対派によって取り壊されるのは本意ではありませんが、それはそれである種仕方がないと思えます。しかし今回の件での市の対応は常に場当たりの深い考えがありません。

法的には私に所有権があるものを所有者の承諾なしに勝手に撤去すれば器物破損という罪になりますが、そんなことさえ考えずに簡単に撤去しかねない人達だと思えたからです。

そんな矢先、やはり市側によって13日午後四時、勝手に撤去されたと洪先生からの連絡を得て呆然としました。

また、この件で市側に取材した記者の話では、撤去に関して「明確な理由と今後の方針は明らかになっていません。“行き当たりばったり”という印象です」と知らせてくれました。

洪先生は内容証明を送って原状回復を求める手もある、また器物破損という犯罪行為であるから警察は取り締まる必要があるとおっしゃっています。

市からは14日付けで「破壊される恐れがあったので、至急撤去したが、今後あなたの同意を得て円満に処理したい」という主旨の公文書が送られてきました。これを放置すればこの内容を黙認したこととなり、それは不本意であるばかりか、今後の責任問題にも関わってくるので対応策を講じなければならないと思っています。

また撤去を知って「今後どうする考えか」という質問も記者の方々から受けておりますが、どう対処すべきか慎重に考えています。15日昼、「とにかくこれ以上の破壊行為を行わないように」と市側に要請し、観光課長から「わかりました」との回答を受けました。

このような市側の対応は軽々しいと思えてなりません。

引き続き反対派の方々と話しあいを重ねるなど、世論が成熟してゆけば、撤去以外の方法もあるのではと思っていましたので残念です。

早々の撤去は市長に対してリコール運動が起こる気配を察知して、慌てて撤去したとも聞いていますが、法を犯して良い道理はありません。

<今後の対応>

この件についてある方に相談したところ、「せっかくここまで苦勞して積み上げてきたものを無駄にしてはならない。あなたと洪先生だけでは限界があるということだ。これは日韓双方で支援者を募り、時間を掛けても論議をしながら実現の方向を模索してゆくべき」とのお言葉を頂戴しました。

私も碑文の修正など妥協点も見つけられるのではと思っています。

4月21日に私と市長とで最後の面談を行った際、碑文の修正についての話しができました。実は最終的に石碑に刻まれた碑文は「修正後」のものなのです。本来は以下のとおりでした。

【修正前】

(表面)

귀향기원비

평화스러운 서포에서 태어나

낮선 땅 오키나와에서 생을 마친 卓庚鉉

영혼이나마 그리던 고향 땅 산하로 돌아와

평안하게 잠드소서

帰郷祈念碑

この平和な西浦に生まれ
異郷の地 沖縄の海に散った卓庚鉉さん
その御霊なりとも 懐かしき故郷の山河に帰り
安らかな永久の眠りにつかれますように

(裏面)

태평양전쟁 때
사천에서도 많은 이들이 희생되다
전쟁 때문에 소중한 목숨을 잃은
모든 이들의 명복을 비노니
영혼이나마 영원히
평안하게 잠드소서

二〇〇八年 五月

구로다 후쿠미

太平洋戦争時

泗川でも多くの方々が犠牲になりました
戦禍によって尊い命を失った
全てのみなさまのご冥福を祈るとともに
その御霊が安らかな眠りにつかれますよう
お祈りいたします

二〇〇八年 五月十日

黒田福美

*****これを以下のように修正したのです。*****

【修正後】

(表面)

귀향기원비

태평양전쟁 때
사천에서도 많은 이들이 희생되다
전쟁 때문에 소중한 목숨을 잃은
모든 이들의 명복을 비노니
영혼이나마 영원히
평안하게 잠드소서

帰郷祈念碑

太平洋戦争時

泗川でも多くの方々が犠牲になりました

戦禍によって尊い命を失った

全てのみなさまのご冥福を祈るとともに

その御霊が安らかな眠りにつかれますよう

お祈りいたします

(裏面)

평화스러운 서포에서 태어나

낮선 땅 오키나와에서 생을 마친 卓庚鉉

영혼이나마 그리던 고향 땅 산하로 돌아와

평안하게 잠드소서

二〇〇八年 五月

구로다 후쿠미

この平和な西浦に生まれ

異郷の地 沖縄の海に散った卓庚鉉さん

その御霊なりとも 懐かしき故郷の山河に帰り

安らかな永久の眠りにつかれますように

二〇〇八年 五月

黒田福美

碑文を表裏入れ替えたのです。

4月末になって反対勢力が表立ってきたために私達は碑文を変えることにしました。その際、私は市長にこのような提案もしました。

「そんなに卓庚鉉にまつわる碑文が反発を受けるなら、表面には大きく『帰郷祈念碑』の文字だけを入れ、裏面には『太平洋戦争下』につづく文章を記すことにし、卓庚鉉さんに対する慰霊の文章はいつそのこと全て削除しましょう」と。

ところがその時の市長の回答は「それでは意味がない」、だったのです。

私は市長がそこまで決意されているならと表裏を入れ替えることで合意しましたが、今となつては、もしこのようにしていたらこまでのことになったろうかという思いも致しています。

最後に私が準備しておりながら遂に発表することのなかった「式辞」をご紹介します。除幕式当日、日韓両国語で読み上げるつもりでした。

これが私の真意でございました。

どうか私の心をお汲み取りください。

式 辞

本日は沢山の方に「帰郷祈念碑」の除幕を見守っていただき、心から感謝しております。

今をさかのぼる十七年前、私の夢に一人の兵士が現れ、「自分は飛行機乗りだった。戦争で死んだことに悔いはないが、ただ一つ残念なのは、自分は朝鮮人なのに日本名で死んだことだ」と告げたのです。

死して尚、他者の夢に現れて無念の思いを語るとはただごとではないと思いました。

その兵士は一体誰だったのか。

永年に亘って調査を続けながら、たどりついたのが光山文博こと卓庚鉉さんでした。

「名前を奪われた民族の悲しみ」を訴える彼のために、たとえささやかなものでもよい、生まれ故郷に本名を記した石碑を建て、その魂を慰めたい。

この思いに共感してくださったホン・ジョンピル教授の献身的な支援を受け、故郷の地西浦を訪れ、地元の方から生家近くの土地を提供していただきました。

私達は感謝して、そこに小さな石碑を建てるべく準備をしていると、しばらくして「どうせならもっとよいところに建ててはいかがか」という声が地元からあがり、金守英泗川市長に相談したところ、このような広大な土地を提供していただく運びになったのです。

また、弘益大学教授であり、世界的彫刻家でいらっしゃる高承観博士が、「この石碑建立には歴史的意義がある」とおっしゃって、このような素晴らしいモニュメントを制作してくださいました。

マスコミの方々もこれを大きく報じてくださり、大勢の皆様の声援に後押しされ、思いがけずも韓日の新時代を象徴するような除幕式になったと思っております。

「帰郷祈念碑」の完成までにさまざまにご協力くださった沢山の方々に、この場を借りて心からの感謝を申し上げます。

みなさまのご理解とお力添えで大きな広がりを見るなか、はじめは一兵士を慰霊する碑石をと考えていましたが、次第に太平洋戦争で犠牲になった全ての皆様を慰霊するものでありたいと願うようになりました。

特に「異境の地」にさまよう魂が、故国へ帰り着く場所になったらと思います。

日本はかつて朝鮮の人達から民族の名前を奪いました。

更に、その人達を兵士や労働者として日本はもとよりロシアやサハリン、南方の島々など世界各地に送ったのです。

過酷な状況下で命を失った方たちは沢山います。そんな人達はついに日本人として葬り去られたまま、霊魂は浮かばれずにこの世をさまよっているにちがいません。

夢に現れた兵士は自分自身の無念だけでなく、彼等の無念をも私に告げたかったのだと思いました。

そしてその兵士は世界中に散らばった、さまよえる多くの犠牲者の魂を率い、今日、懐かしい故郷の山河へ帰還を果たそうとしているのです。

頂上にヤタガラスを象ったこの巨大な塔は、故国を目指して舞い戻る霊魂たちに、灯台のように帰り着く場所を示してくれることでしょう。

そして今こそ私達は彼等の帰郷をこころから待ち望み、その魂が永遠にやすらかであることを祈り続けるのです。

2008/5/10

黒田福美

